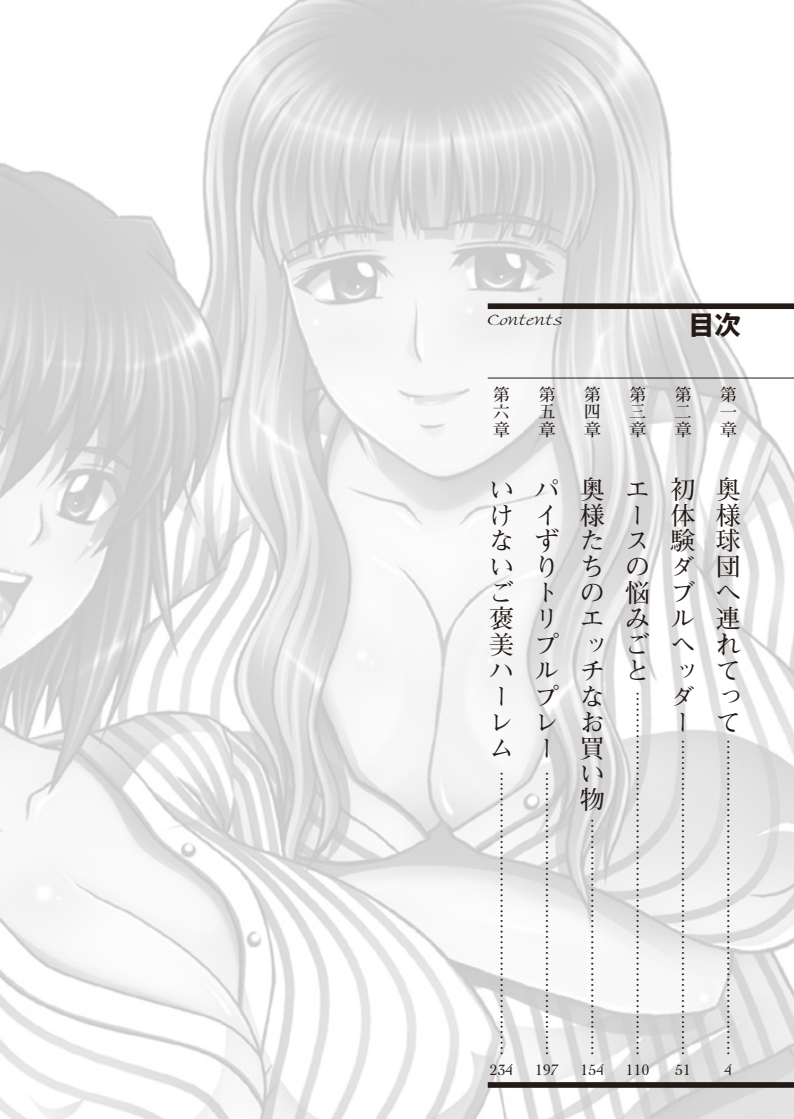
人妻誘惑プレーボール
ヒミツのご褒美

草飼晃
挿絵／マサ兄

立ち読み版

KTC
KILL TIME COMMUNICATION



Contents

目次

第一章　奥様球団へ連れてって……4
第二章　初体験ダブルヘッダー……51
第三章　エースの悩みごと……110
第四章　奥様たちのエッチなお買い物……154
第五章　パイずりトリプルプレー……197
第六章　いけないご褒美ハーレム……234

登場人物 *Characters*

篠塚 幸太
(しのづか こうた)

希美の従弟の高校一年生。中学時代に野球をやっていたこともあり、希美に請われてママさんソフトボールチームの助っ人になる。

仰木 希美
(おおぎ のぞみ)

二十二歳の新婚若奥様。運動神経がよく、ソフトボールチームのキャプテンを務めている。程よいサイズの美乳とポニーテールが魅力の、幸太の従姉。

星野 あやな
(ほしの あやな)

青果店のおっとりした奥様で、チームのマネージャーも兼任している。結婚八年目、三十三歳ながら、魅力的な美巨乳の持ち主でもある。

水原 麻理
(みずはら まり)

チームのエースを務めるクールな若妻。スポーツマンタイプの均整のとれたプロポーションが魅力的だが、エッチに奥手な性格の為、性について悩みがある様子。

第一章　奥様球団へ連れてって

風鈴の鳴る音が耳に心地よい夏。田舎の空は青く澄み渡っていた。

「こんにちは！　お手伝いに来ましたあ！」

さわやかな声に、庭先で荷ほどきをしていた幸太（こうた）は手の動きを止めた。

玄関口に若い女性が立っている。

「あ……希美（のぞみ）姉ちゃん」

「幸太くん。ひさしぶりねっ！」

従姉は幸太の顔を見てにっこりと笑った。

痩せ型の肢体を丈の短い半袖チュニックに包んでいる。その下は太もものムチムチさを強調するかのようなタイトなジーンズという姿だ。

ほっそりとした頬の形。きらきら光る黒い瞳。手触りのよさそうな黒髪を胸元のあたりまで垂らしている。

（うわ、しばらく会っていないうちに、希美姉ちゃん、やけにまぶしくなった……）

幸太はごくりと唾を飲みこんだ。

声が聞こえたのだろう。さっきまでテレビの向きやソファの位置で言い合っていた両親も奥から出てきた。
「あらあ、希美ちゃん、よく来てくれたわねえ」
「いいのかい。新婚さんなんだろう。ご亭主がさみしがってるんじゃないのかい」
幸太の父親のことばに希美は目元を赤らめる。
「やだあっ、やめてくださいよお。あの人は今は会社ですから！」
ああそうか、と幸太は思った。
（希美姉ちゃんって、新婚なんだよな……）
今の苗字は仰木（おおぎ）だったか。
結婚式の時は幸太は高校受験の追いこみだったので、両親だけが出席した。
旦那さんは普通のサラリーマンだと聞いている。
（新婚ってことは、やっぱり……セ、セックス、とか、するんだろうなあ……）
思春期の健全な男子としては、ついついそういう方向に思考がまっしぐら。
「前のお店が閉まっちゃったから、みんな待ちかねてるんですよ、新しいお店のオープン。いつなんですか」
「もう少し先だなあ。まず住む方を落ち着かせて、店はそれからだな」

幸太の父親が転居先として愛知県渥美半島の先っぽに位置するここ宇津木町を選んだのは、希美の母親（幸太の母の姉）から紹介されたからだった。

宇津木中学校の傍のバス停前で『まちぼうけ』とかいう喫茶店を経営していた老夫婦が転居することになり、店舗兼住居が売りに出ていた。父親からすれば渡りに船だったのだろう。田舎でお好み焼き屋を開くことを長年夢見ていたらしいから。

高校受験が済んだばかりなのにまた転入試験を受ける羽目になってしまったわけで、幸太にとってはいい迷惑だ。

（大人なんだな……きれいだなあ）

談笑している希美のボディラインから、幸太は目が離せなくなっていた。

若妻らしいさわやかな色合いのチュニックの胸はきれいなお椀形にふくらんでいる。胴から腰へとなめらかなラインが描かれ、大きな桃のように安定感のあるお尻がジーンズの生地を煽情的なまでに突っ張らせている。

なぜか生唾が湧き、手のひらにじわっと汗が滲み出す。

年賀状はなんとなくやり取りしていたけれど、会うのはせいぜい数年に一度。ちゃきちゃきしたお姉さんという印象が強かったのに、色っぽくなったなと思う。六つ年上だから二十二歳。

「ねえ、幸太くん。確か中学時代はずっと野球やってたんだよね？」
希美が幸太のところに歩み寄ってきた。
「え？　うん、まあ……そうだけど」
なぜ急にそんな話に？
「そんな幸太くんを見こんで、お願いがあるんだけどな」
「お願い？」
「あのね。いっしょにソフトボールやらない？」
この町のママさん草ソフトボールチームに入っているのだと従姉は説明してくれた。
なんでも今季はキャプテンを務めているんだとか。
「夏休み、何か予定あった？　無理？　なんとかお願いできないかなあ」
「いや……まあ……無理ってことはないけど」
一学期終了と同時というタイミングで転居してきたので、まだこの田舎町にはいっしょに遊びに行ける友達なんかいない。
それでも一応夏休みの過ごし方について考えてはいた。
「おれ、実は今年の夏は思いっきりインドアライフをエンジョイしようかなあと」
中学時代は野球部の練習が忙しくて、ゲームソフトで遊ぶ暇もなかった。最近試し

にやってみたら、これが面白くてしかたないのだ。
「ねえ、幸太くん、お願い！　人数が足りなくて困ってるのよ。地元の中学生高校生にはなんだかんだでみんな断られちゃって。参加して欲しいなぁ」
今度はぎゅっと手を握られてしまった。
「でで、でもママさん草ソフトボールチームって……いいの？　男のおれが入っちゃ、まずいでしょ？　希美姉ちゃんだって、まだママさんじゃないよね？」
女性の手のやわらかさに、自分の声が上ずってしまうのがわかる。
「全然大丈夫！　すっごいゆるいチームだから。チーム名は宇津木ゲッタウェイズ。格好いいでしょう。練習試合の相手だって男女の混成だったりするから、平気よ」
「うーん。でも、おれはもうスポーツは……」
「一人足りなくて、その練習試合ができないから困ってるのよ、みんな。練習よりも試合を楽しみたくてやってるようなものだから。来てくれない？　ね？　ね？」
顔を近づけて頼んでくる従姉。
（わ……わわっ！）
薄化粧がほどこされたその肌は、思わず指でさわってみたくなるくらいにやわらかそうだった。形のよい小鼻が呼吸に合わせてゆっくりとひくつき、淡い桃色のくちび

るは、まるで何かを待っているかのよう。
幸太の中で夏休みの予定はグラグラと揺らいだ。
「う、うん。ソフトボールやってみるのも、い、いいかも……」
「わあ、ありがとう！　あたしだってチームに入るまではソフトの経験なかったんだし。幸太くんならやれるわよ」
考えてみれば店舗と住まいが同じなので、インドアライフを楽しむどころか店の手伝いでひと夏が終わるかもしれなかった。それなら新婚の従姉といっしょに過ごした方が楽しいに決まってる。
「練習は週二回、水曜と土曜ね。とりあえずはその格好で来てくれればいいわ」
幸太の胸板のあたりや腰のあたりに目を向けると、希美はなぜか目元を赤らめ、もじもじし始めた。
「がんばってくれたら、幸太くんに何かあげても、いいかな……なんて言うのかな、たとえば、ご褒美みたいなものを」
「ご褒美みたいなもの？」
「さあさあ、あたしお喋りしに来たんじゃないのよね。お手伝いお手伝い」
突然手を離し、背中を向けて、希美は家の中へ戻っていってしまった。

（ありゃ……希美姉ちゃん、急にどうしちゃったんだろう……？）
よくわからない。
人数が増えたおかげで、家具の配置や荷物の片づけはあっという間に終わった。
また遊びに来ますねえ、と幸太の両親に挨拶して若妻は帰っていった。
夏休みはこうして始まった。

※

田舎といっても実に様々。
豊かな大自然に囲まれていて野生動物や希少な植物の宝庫、という田舎もあるだろう。空気がきれいで水もおいしく、訪れただけで肉体も精神もリフレッシュできる、という田舎もあるだろう。
宇津木町はただ単になんにもない田舎だった。
幸太の両親によって新装開店予定の店以外には喫茶店もレストランもない。いちばん近いコンビニへは片道徒歩二十分。これではあまりコンビニエンスではない。
（ま、のどかではあるけどさ……）
新しい自室の窓から外を見ると、夏らしい強い日差しが路面にくっきりと建物の影を落としている。蝉の合唱がやかましい。今日は風はなく、とても蒸し暑かった。

「はいさーっ。幸太くん。迎えに来たよ！」
呼び鈴につづいて玄関の方から元気な声が聞こえてきた。
今日は幸太の練習初参加の日だ。
玄関に出てみると、希美はもうユニフォーム姿だった。
町営グラウンドには着替え用の施設もあるけれど、みんな自宅からユニフォームを着てくるという。主な交通手段が自家用車という田舎ではそれが普通なのだろう。
白地に赤の縦縞が入った襟なしのユニフォーム上衣は前ボタンで留めるタイプ。下は白を基調にしたハーフパンツ。しなやかそうな肘ときれいな膝小僧が剥き出しの若妻のユニフォーム姿は、少年にはなんだか悩ましく映った。
黒髪はポニーテールになっていた。よく似合ってるなと幸太は思う。
「どうしたの、ぼーっとしちゃって。幸太くん。はいさーっ」
「う、うん。それ、どこかの方言……？」
「んもう、ノリが悪いんだなあ。さあさあ、乗って乗って」
Tシャツとトレパンという服装の幸太を助手席に乗せた軽乗用車はがらんとした県道を十分ほど走り、目的地にたどり着いた。
町営グラウンドは周りを木立に囲まれていた。駐車場は雑草の生えたただの空き地。

自家用車や自転車が何台も停まっていた。
「いっけなーい、遅刻遅刻」
希美は車から降りると、こっちよと言って駆け出した。
幸太は揺れるポニーテールの後につづく。
（わわっ、希美姉ちゃんの、お尻……）
臀球が内側からハーフパンツをむっちりと漲（みなぎ）らせている。この前のチュニックと違ってベルトでウエストがきゅっと絞られているだけに、一歩足を踏み出すたびに左右にぷりんぷりんと揺れるお尻がすごく蠱惑的だった。
見蕩れているうちに暑さも忘れてしまうくらい。
（でも、だめだよ……）
幸太は胸を高鳴らせながらも自分に言い聞かせた。
（希美姉ちゃんは結婚してるんだからな。いやらしいことなんて、考えちゃいけない相手なんだ）
何かが起こるなんてあるわけない。ご褒美がどうとか言ってはいたけれど……。
（いやいやいや！　きっと缶ジュースをおごってくれるとかだよな！）
ぶんぶんと首を振って、よこしまな思いを振り払う。

そもそも幸太は年上趣味というわけでもない。まだ童貞だけれど、初体験は普通に同い年相手がいいな、などと思っている。

「どうかした、幸太くん？」

成熟したお尻と形のよい足の持ち主は、怪訝そうな顔で振り返る。

「べ、別に！　なんでもないよ！」

木立を抜けるとコンクリートづくりの平屋があった。着替えのできる設備というのはここのことだろう。その横を通ってすぐのところがグラウンドだった。

フィールドは芝ではなく土。ホームベースの後ろにはバックネットが設置され、一塁側と三塁側に一つずつ駅やバス停で見られるようなベンチが置いてある。

照明設備はない。でも一応外野フェンスがあるし、小さいけれどバックスクリーンまであった。ちょっとした練習試合を行うくらいなら充分すぎるつくりだろう。

すでにユニフォーム姿の女性たちが集まっている。

といってもミーティングをしているわけではなかった。

「快気祝いをいただいたんだけど、おじいちゃん、知らないっていうの」

「ド〇ホルンリンクルのポイントってすぐ有効期限が切れちゃうのよね」

「それがね、いただきもののどら焼きの中身が普通の餡じゃないのよお」

（ありゃ……みんな……ただダベッてるんだ……）
大半が中年のおばちゃんだった。あちらに二人こちらに三人という風に集まって、四方山話に余念がないご様子。
ゆるいチームという意味がよくわかった。
（要するに……主婦の暇つぶし、なんだろうな）
なんとなく初日からやる気を削がれてしまった。どら焼きの中身の普通じゃない餡のことはちょっとだけ気になるけど。
希美が片手を上げて快活に挨拶する。
「みなさーん、はいさーっ」
おばちゃんたちも口々に「はいさーっ」と答える。
幸太は首をかしげた。この地方限定で流行っているんだろうか？
「えーと、みなさん。聞いてください！　ここにいる子はあたしの親戚の子なんですけど、助っ人として参加してくれることになりました！　待望の新メンバーです！」
自己紹介してと言われ、幸太はもごもごと名前を口にし、ぺこんと頭を下げる。
おばちゃんたちはさっそく幸太を取り囲む。にこにこして握手を求めてくるおばちゃんもいたし、親しげに肩を叩いてくるおばちゃんもいた。

「お兄さん、いくつ？　中学生？」
「こ、高校一年です」
まあ若いのねえとか、わたしがあと十年若かったらねえとか、幸太を肴（さかな）におばちゃんたちは勝手に盛り上がり始めた。
（うわ、たまんないなあ、なんか、こういうの……）
これでは地元の中学生や高校生が参加なんてするわけがない。幸太だって知っていたら絶対来なかった。
「本当、人が足りなくて困ってたんですよ。ありがとうねえ、助っ人くんー」
おばちゃんたちの雑談の輪から逃れ出た幸太に、ちょっと小柄な女性がおっとりと話しかけてきた。
（わ。胸、すごっ！）
かなり豊満な乳房の持ち主だ。ユニフォームは風船を詰めこんだみたいにふくらんでいて、かなり窮屈そう。幸太の目はついつい吸い寄せられてしまう。
「こちらは星野（ほしの）あやなさん。青果店の奥さん。マネージャー役もしてくれてるの」
希美が紹介してくれた。
「助っ人くんには、後で飴あげましょうねー」

「は、はあ……ありがとうございます」
発言自体はおばちゃんっぽかったが、柔和でやさしそうなその顔つきはまだおばちゃんという年齢ではないだろう。三十歳くらい？　よくわからない。明るめのブラウンにカラーリングされた髪は顔の左右からボリュームたっぷりの胸元へ垂れている。
（すごい。何センチあるんだろうなあ。そんなこと訊けないしなあ……んっ？）
遅れてグラウンドにやってきた女性がいた。
駐車場から走ってきたようで少し息を切らしている。スポーツバッグをベンチに置いてペットボトルを出し一口だけ水分補給すると、今度はその場で打席に入る前のイチローのように黙々と屈伸運動を始めた。
（わ、なんか格好いい……）
幸太の心臓はまたドキンドキンと高鳴った。
軽くウェーブのかかったブラウンの髪は肩にかからないくらいのミディアム。大人っぽい風貌。やっぱり幸太には年齢はよくわからなかったが、まだ三十には達していないように見える。胸のふくらみはそこそこっぽいけど足が長くてスタイルがよい。
その女性には希美の方から声をかけた。
「麻理（まり）さん。この子、助っ人くんです。あたしの親戚。今度この子用のユニフォーム

をつくりますので、麻理さんのお店で注文の方、お願いできますか」
麻理と呼ばれた女性は短く、
「うん、わかった」
と言ってうなずくと、屈伸運動を再開させる。
驚いたのは幸太だった。
「希美姉ちゃん。わざわざおれのために新しいのつくってくれるの？」
「産休で抜けた大野さんのはクリーニングから戻ってきたんだけど、Ｓサイズだから背の高い幸太くんには無理だと思うの。代金くらいはチームの年会費から出すから、幸太くんは気にしなくていいのよ」
「でも、おれ、これからずっと参加するかどうかは、わからないし……」
「そんなこと言わないで。きみには期待してるんだからね」
「期待されても……」
（このチームなら、うちの母さんを誘えばいいのに）
いや、誘ったんだろう、と幸太は思う。でも母さんはスポーツなんて観るのもきらいというタイプだし、開店準備もある。だから断ったんだろう。
「じゃあみなさん。そろそろ練習しましょうか！」

希美はまた全員に声をかける。ちなみにキャプテン役は持ち回り制で年齢も実力もいっさい関係ない、と車の中で希美から聞いていた。
「まずは走りこみから始めまーす」
（げっ）
走りこみ。
中学で野球を経験している幸太にとってそれは校舎の周りを何十周も走らされることを意味したので、思わず顔をしかめてしまった……が。
いざ始まってみれば、このソフトボールチームでの走りこみなるものは、ダイヤモンド上を一列になってみんなでぐるぐる走る、というものだった。
「ああん、助っ人くん、速いんですねえ。待ってくださいー」
（えっ……わわっ）
走りながら振り向くと、例の巨乳の奥様が幸太に向かって駆けてくる。一歩足を踏み出すごとにGカップかHカップはありそうなハンドボール型の乳房肉が布地の中でたぷんたぷんと挑発的に揺れる。
「……っ！」
自分の顔がカーッと赤くなるのがわかった。あわてて顔を前に戻し、ベースランニ

ングに集中し直す。
（それにしても……これはベースランニングですらないぞ……）
ジョギングがいちばん近いだろう。おばちゃんたちは全員、全力疾走なんてしていない。麻理という長身の女性や従姉を見ると、軽く流している感じだ。
（でも、まあ……おばちゃんたち、楽しそうだし、これはこれであり……なのかな）
そういう気がしてきた。
高校に上がってからの幸太はスポーツをやっていない。都内の高校に入学してすぐ野球部の練習を見学しにはいったけれど、あまりにもキツそうで、野球をつづける気がなくなってしまったからだ。
（そうだよな。スポーツって、キツいだけじゃな。楽しまなきゃな）
それに、この程度のチームなら中学時代の野球部の経験がものを言うだろう。
（よーし、いっちょう、おれが、いいところ見せてやるか！）
なんたって助っ人なんだからな！
外国人枠の助っ人選手といえば活躍して当たり前。女性ばかりのこのチームの中では、やはり自分は実力を買われて入団した助っ人なんだ。幸太はそう思った。
「じゃあ、次はキャッチボールをしましょう！　二人一組になってくださーい」

ポニーテールの若奥様がまた指示を出す。
幸太は希美と巨乳の奥様との三人でキャッチボールすることになった。
のだけれど。
「……あれっ？」
他の二人は普通にボールを投げたり受けたりしているのに、幸太だけはどうしてもうまくキャッチできない。
「……おかしいなあ」
「幸太くん、きっとまだボールの大きさに慣れてないからよ」
「助っ人くん、大丈夫ですよ。みんな最初はそうだったの。そのうち慣れますよー」
「あ、はい……」
初心者扱いされてしまった。まあソフトボールに関しては初心者だけど。黄色いボールを使うだなんてことも知らなかったし。
それでも十分くらいつづけるうちに、ぽろぽろ落とすことはなくなってきた。
その次は打撃練習。
「じゃあ幸太くん。がんがん打っちゃっていいからね」
従姉からバットを渡され、幸太はさっそく打席に入った。

（ようし！　今度こそ、野球経験者の実力、見せてやるぞ！　ソフトボールなんてどうせ下手投げだろうし、ボールが大きいんだから当たりやすいよな！）

ピッチャーはあの、麻理さんという長身の女性だった。

ゆったりとモーションに入る。腕がぐるっぐるっと振られ、足が前に踏み出した、と思った次の瞬間にはもう――。

ばしいん！　ボールが目の前を通過し、キャッチャーのミットにおさまっていた。

幸太はバットを振ることすらできなかった。

（ボール、速っ！　そ、それに、そもそもピッチャー近すぎ！）

そうだった。打席に立ってみるとソフトボールはピッチャープレートがかなり近い。加えて、麻理はソフトボール経験者らしい。フォームも様になっていた。

「どう？　やっぱり野球とは少し違うのかな？」

「う、うん」

幸太はうなずいた。

「麻理さん、今度は変化球をお願いしまあす」

ようし次は打ってやると決意したものの、二球目も手が出なかった。ボールは手元で大きく縦に跳ね上がって、ずばん！　という小気味よい音とともにミットに吸いこ

まれていた。
「今のがライズボールね」
「う……」
名前だけはいつかどこかで聞いたことがあったが、打席に立って体験するのは初めて。中学野球では横に曲がるボールすら珍しかったのに、縦の変化球に咄嗟に対応できるわけがない。
三球目はさっきよりも低めだったが、やはり縦の変化球。やはり手も足も出ない。
「今のがローライズ」
「……ローライズ？」
「おへそ丸出し、かがんだら下着丸見え――って意味じゃあないからね」
一瞬そういう意味かと思った。
「低いライズボールってことね。ねえ、幸太くん。振らなきゃ絶対当たらないよ？」
「わ、わかってるよ、希美姉ちゃん！」
しかし二十球ほど投げてもらっても、当てることすらできなかった。
「野球とソフトって、そんなに違うのかしら……」
希美がなめらかそうな頬にひとさし指を当てて、んーと首をかしげる。

「平気よ、お兄さん。これからこれから」
「美人ばっかり揃ってるから緊張しちゃってるんでしょ？　無理もないわあ」
幸太に励ましのことばをかけたかと思うと、おばちゃんたちはまたわいわいと雑談を始めた。
（ううう。こんなはずじゃあ）
希美は、うなだれる幸太の腕をぽんぽんと叩く。
「大丈夫、大丈夫。あたしだって最初、全然打てなかったし。幸太くんは野球のセンスがあるんだから、慣れるのもあたしより早いと思うよ」
打撃練習の次は守備練習だった。おばちゃんたちがグラブを手にしてフィールドへ散っていく。幸太もそれに混ざった。
「じゃあ、いきまーす」
バットを握ってかつーんとノックを始めたのは希美。経験はなかったとか言っていたが動作は軽快だった。運動神経がよくて何をやってもこなせるタイプなのだろう。
みんな慣れているのか、意外とそつなく捕球している。
ゴロが幸太のところにも来た。華麗にさばいて、一塁方向にスローイングしようとした――とたん、

「いつっ」
指に痛みが走り、ボールはぽとんと落ちて土の上を転がった。
「大丈夫、幸太くん？」
バットを放り出し、従姉が駆け寄ってきた。他のみんなも心配そうに集まってくる。
「突き指したみたいだ……でも、これくらい、平気だよ」
「ああん、だめだめ。ちゃんと手当てしなくちゃ。麻理さん、代わりにノック、お願いします」
面倒見のよい従姉に腕を引っ張られて、幸太はグラウンドを後にした。

※

「確かこっちに冷却スプレーとか湿布とかあったと思うから」
「え……いや、ここ、女子更衣室なんじゃあ」
大丈夫だよといくら言っても聞いてはもらえず、女子更衣室に連れこまれてしまった。例のコンクリートづくりの平屋だ。
エアコンはなく蒸し暑い。この建物はグラウンドを取り囲む木立の中にあるので、サウナ状態にはならずに済んでいるようだが。
「いいからいいから。どうせ誰も使ってないから、更衣室なんて」

「ええと……そうでもないんじゃあ？」
全員が家からユニフォームを着てくるというわけでもないらしい。いくつかのロッカーは半開きになって、ハンガーにかかった普段着らしいものが覗いているし、香水の残り香みたいなものがほのかに漂ってもいる。
「やっぱりおれがここに入っちゃまずいよ。外で待ってるよ」
「あったわ。冷却スプレー。こら、待ちなさい。逃げちゃダメ」
従姉はスプレーを吹きかけてから、やさしくテーピングまでしてくれた。
「重症だといけないからね。あしたになっても痛かったら、お医者さん、行こうね」
「これはそんなひどい突き指じゃないと思う……それに、あのう、希美姉ちゃん」
帰りの車の中で言おうと思っていたけれど、今言ってしまおうと幸太は決めた。
「おれ、やっぱり……向いてないよ。誰か別の人を見つけてくれないかなあ」
従姉が困惑した表情になる。
「えーっ？　やっぱり、あれ？　おばさんばっかりでイヤになっちゃった？」
「いや、それより……なんかおれ、ソフトボールを甘く見すぎてたみたいで。こんなに難しいなんて知らなかったから」
「んー困っちゃうなあ。初日で辞められたら、連れてきたあたしの面目もつぶれちゃ

うし。もうほんと、他に当てもないのよ」
ね！　お願い！　と希美は両手の指をお祈りの形に組み合わせる。
「でも、元々おれ、野球だって高校ではつづけるつもりなかったわけで。この夏はやっぱりインドアライフを……」
「ちょっと幸太くん。きみは、始めたばっかりですぐ諦めちゃう子なの？　簡単に弱音を吐く子なの？　それでこれからの長い人生、渡っていけると思ってるの？」
懇願の次はお説教が始まってしまった。
でも幸太の決心は揺るがない。
「なんと言われようと、やらないよ！　おれはもう決めたんだよ」
「んもお。しょうがないなあ」
他に誰もいないのはわかってるはずなのに、希美はなぜか人目を気にするかのように室内をきょろきょろと見回した。
「じゃあ……今日の練習に来てくれたご褒美、ここで先にあげちゃおうかな。それで考え直してみてくれないかなあ？」
「なんと言われたってもうやらな――」
幸太のことばは途切れた。

（えっ？）
いたずらっぽい笑みを浮かべた希美は、いきなり幸太の手を取って自分の方に引き寄せた。
「ちょ、ちょっと、希美姉ちゃん。いったい何を……」
「ふふっ。隠しごとって、スリル、あるよね？」
幸太の手のひらはユニフォーム越しに、むにゅと若妻の乳房を押さえていた。ボリュームに満ちた、たゆん、とした感触があった。
「あ、あ、あ、あの……希美姉ちゃん？」
「ほら。いいのよ、もっとさわってみて」
たちまち頭にカーッと血が昇る。心臓はズッキンズッキンと激しく脈打ち始める。
「だめだよ、希美姉ちゃん……おれまだ高校生だし、希美姉ちゃんは結婚してるし」
「そうね。でも、少しだけならいいんじゃないかなあ」
腕を引こうとしたが、希美が上から手の甲を押さえつけてきた。だからわかってしまった。見かけはどちらかといえば痩せっぽちの希美だけれど、その中身はやっぱり充分に成熟しきっている、ということが。
はちきれんばかりの張りと勢いをたたえたそのボディが、ぴちぴちした新婚女性の

色気を発散している。しかも今は幸太に向かって。
（うううう……女の人のおっぱい……おれ、初めてさわった……）
さわり心地はぼんやりと夢想していた以上のものだった。もちろんユニフォームの生地はごわごわしているのだけれど、そんなこと関係ない。つくりたての肉まんのようにもっちりとして、空気をいっぱいに詰めた風船のように張りつめてもいる。
「うふふ。これでもあたし、Fカップなんだからね」
従姉の自慢げな声にも幸太は半分上の空。
始めは錯覚かと思った。でも綿の厚い生地を通してかすかに、どきん、どきん、という従姉の鼓動までつたわってくる。
その鼓動に合わせるかのように幸太の下腹部はもりもりと熱くなってきた。
「ふふふっ。どうかした？」
二十二歳の新婚奥様はもう一方の手で幸太の髪をさらさらと撫でてきた。
（えっ？　や、やばい！　これも気持ちいい）
女の人にやさしく髪を撫でられるだけでヒリヒリした快感が背すじにまで走るだなんて！　全然知らなかった。幸太はびっくりして身動きもできなくなっていた。
指先は頭から離れ、首すじをつーっと這ってきた。寒けにも似た鋭い快感が触れら

れたところからゾクゾクッと広がっていく。
かと思うと今度はTシャツの袖口から伸びる二の腕をねっとりと撫でられた。これもまた想像したことのなかった気持ちよさ。
「くわあ」
「うふふっ」
初々しい幸太の反応を見て楽しそうに笑うと、絹のようになめらかな手指は高一少年のもう一方の手を取って自分のウエストに導いた。
「あたしの腰回り、どう？」
「い、い、いや、どうと訊かれても……」
幸太はもうしどろもどろ。ものがうまく考えられない。腰に触れているのは突き指した方の手だったが、もう痛みは引いている。仮に残っていたとしてもそれどころではない精神状態だ。
（なんか、細いのに、しっかりしてる感じ……お、女の人の身体って、やわらかくって、でも引き締まるところは引き締まっていて……）
片手ではおっぱいを包みこみ、片手では抱き寄せるように腰に触れている。腰を抱くのも初めての経験だ。中学時代は部活優先の生活だったせいもあって恋愛や告白ど

ころではなかった。デート一つしたことはなかった。
（もっと、もっと、さわっていたい……もっと身体中を撫で回してみたい……）
「うふふ。幸太くんに、さわられてるね、あたし」
漆黒の髪の若妻は上気した顔を近づけてきた。
「ね。目を閉じてみて」
「えっ？」
「いいから。ほら」
まぶたを伏せると、少し濡れたやわらかいものがそっと頬に押し当てられた。
「希美姉ちゃん……っ」
「じっとしてね」
ちゅ、ちゅっ、と触れたり離れたり。そんな軽いキスを何回か繰り返されただけで、顔に広がる神経全体がぞわぞわと目を覚ます。
「うふふ。こういうご褒美、幸太くんはきらい？」
返事をする前にいきなり、幸太のくちびるに希美のくちびるが重ねられた。
（の、希美姉ちゃん……っ）
キスだ。本物のキスだ。

（おれ、希美姉ちゃんとキスしてるんだっ！）
頬へのキス同様、小鳥が啄（ついば）むかのような、ちゅ、ちゅ、という口づけ。それでも幸太は立っていられないくらいのクラクラ感に見舞われていた。
（くちびるって、やわらかいけど、おっぱいのやわらかさとも、全然違う）
何とも比べられないようなやわらかさ。
希美のくちびるが触れたところが最初はちりちりした変な感じになる。でも同じところをまたくちびるでやさしく擦り回されると、そのちりちりしたむず痒さがすぐに快感に変わり、首の方にまで広がっていく。さっき髪や首すじを撫でてもらった時以上に強烈に。
（キ、キスって、こんなにすごいのっ？）
テレビドラマや映画でキスシーンを見たことはある。あんなものは握手の延長くらいだろうと思っていた。
違った。くちびるがこんなに敏感だなんて今日まで知らなかった。頭の中は新品の白Tシャツのように真っ白になり、トレパンの中で肉棒はにょっきりと真上を向き、身体中の毛穴という毛穴が開いて水あめみたいな濃い汗がどろりと流れ出す。
「幸太くん、ひょっとして、初めてだったのかな？」

やさしくささやかれて、幸太はこくこくとうなずいた。それが精いっぱい。とても返事なんてできない。

「あたし、ファーストキス奪っちゃったんだね。幸太くん、後悔してる？」

今度は反射的に首を左右に振った。気持ちよすぎて思考能力が落ちているので、後悔しているのかどうかもよくわかっていない。

「じゃあ、もう少し、大人のキスもしちゃおうか？」

年上の若妻はふたたび、しっとりと潤ったくちびるを重ねてきた。

今度はそれがなかなか離れようとはしない。

（お、大人のキス……？）

二十二歳の舌先が幸太のくちびるを割り、歯に当たった。息苦しくなって歯と歯に隙間ができたとたん、舌先が口の中に入りこんできた。

「むふぅ……希美姉ちゃ……くふう」

「うふふ。くちゅ……」

くねる舌先が歯を舐め、歯茎を擦り、幸太の舌にまでからみついてくる。幸太はもう翻弄されるばかり。心臓はばくんばくんと弾み通しだし、鼻や口で呼吸をつづけるだけであっぷあっぷ。相手に何かをしかけるなんてできそうにない。

（希美姉ちゃんの舌、やわらかい……）

若妻のねっとりとした舌は貪欲に十六歳男子の口の中を動き回る。ちゅずる、ちゅずると音を立てて唾液を吸い上げられる。

（これが大人のキス……！）

希美姉ちゃんは夫を相手にこういうキスを覚えたんだろうか。それとも結婚前に誰か他の男とつき合っていて、その人に教わったんだろうか。

歯茎をねろねろと舐められながら嫉妬心みたいなものも湧き起こったけれど、それもすぐに快感という名の生温かい靄（もや）にかき消されてしまう。

（おれの口の中が、希美姉ちゃんの味でいっぱいになってる……）

希美の唾液と自分の唾液がとろりとろりとお互いの口の中で混ざり合う。それがお互いの口の中を行ったり来たりしている。やわらかなくちびるは舌の動きに合わせて、むにゅと強く押し当てられたり、ぬるりと唾液の糸を引きながら少しだけ離れたりを繰り返す。そのたびに二人の口からくちゅり、ぺちゃりとみだらな音が立った。

（ああ、希美姉ちゃん、おれ、こんなキスを希美姉ちゃんとできて、うれしいよ！）

初キスも初セックスも同じ年頃の処女と経験したいと妄想していた。でもそんなのいいやと幸太は思った。初セックスはともかく初キスはこれでいいや、と。

だって、キスがこんなに気持ちよすぎるだなんて今日まで知らなかったのだから。これを経験しておけば、誰か同年代の女子とキスする時にもあわてないで済むだろう。うれしいという気持ちをつたえたくて、幸太もおずおずと舌を伸ばし希美の口中をつついてみた。ぷちゅくちゅとまた湿った音が立つ。

あら？　という感じに一回動きを止めたかと思うと、人妻の舌はさっそく迎え撃つみたいに童貞の舌にからみついてくる。

口と口が重なったままで希美に頭を抱き寄せられた。耳たぶを指腹でなぞられ、幸太は肩や首をビクンと動かしてしまう。

従弟がいちいちリアクションを見せるのがうれしいらしく、うふふと甘く笑い声を上げると希美は深々と舌を挿し入れてきた。前歯の奥にひときわ敏感な部分があることを幸太は教えられた。そこを舌で擦られただけで腰まで震えてしまう。

（な……何、これ……すごい。ものを食べる時は気づかないのに……）

刺激は強いうねりとなって下腹部にまでつたわり、トレパンの中のペニスは痛いくらいに勃起しきってしまった。

それに気づいているのか、いないのか。希美の手は幸太の頭髪をまさぐってくる。親指とひとさし指が毛先をさすり、残り三本の指が毛の中に埋まって頭皮を愛撫する。

（どうかなりそうだ……気持ちいいよお……っ）
幸太は口や喉だけでなく、もう全身が痺れきっていた。
女子更衣室の磨りガラスの向こうからは蝉の鳴き声に混ざって、ノックの音やおばちゃんたちの笑い声が聞こえてくる。
（……いいのかな？　主婦の暇つぶしかもしれないけど、それでも、みんなはちゃんと練習してるのに。おれと希美姉ちゃんだけ、こんなところでこんなことをして）
治療に行ったきり戻らないのを心配して誰かが様子を見に来るかもしれないのに。
キスの快感に痺れる頭の片隅でそんなことを思っていたら。
泡混じりの唾液の糸をねばねばと引きながら、希美の口がゆっくり離れていく。
「ふはあっ……！」
「うふふっ」
肩を上下させて息を乱している幸太を見つめながら、希美は自分のあごに手を当てて流れ落ちてくる唾液を拭った。
「ねえ、幸太くん」
年上の手が幸太のトレパンの股間に吸いついてきた。
「こんなに硬くしちゃって。あたしのキスで、こうなってくれたのかな？」

ゆっくりと、トレパンとトランクス越しに肉棒の幹のあたりを撫で上げられる。
「うわわっ……ちょ、ちょ、タイム」
甘い痺れがじょわーっと広がり、ペニスはまたいちだんと硬くなってしまった。
「幸太くん、どう、ご褒美？　次も来てくれる気になった？」
「いや、あの、その、どうって言われても……」
初めて体験することばかり。童貞には強い刺激ばかり。それはうれしいのだけれど。
（希美姉ちゃんはどういうつもりなんだろう……結婚してるのに。おれをチームに引き留めるために、内心ではいやでたまらないのに、こういうことをしてるんじゃ）
でも、うまい尋ね方なんて思いつかない。
黙ってしまった幸太を見て、従姉は何か誤解したようだ。
「んもう、わがままなのねっ。まだご褒美足りないの？」
しょうがないなあ、と言いながら希美は幸太のトレパンのゴムに手をかけた。
「な、何を」
「じっとしてなさい」
鼻息がかかるくらいに顔を寄せて童貞の質問を封じると、トレパンをずるずると下ろし、運動靴といっしょに脱がせてしまう。

「うふふ。こんなに興奮してくれてるんだ？」
幸太の穿いているボクサーショーツ型のトランクスには、勃起したペニスの形がはっきりと浮き上がっている。
「は、恥ずかしい……」
「そう？　じゃあ、あたしも幸太くんに合わせてあげる」
「え……っ？」
若妻は照れたような顔つきになると、前ボタンを外してユニフォームの上衣をするりと脱いだ。窮屈そうにおっぱいを詰めこんだブラが露出する。
ベルトをゆるめてハーフパンツも下ろしていく希美。幸太に見せつけるように片足立ちになり、左、右と順番にゆっくり爪先から抜いてしまう。
「これなら恥ずかしくないでしょ。同じような格好なんだから」
Tシャツとトランクスだけの姿の幸太の前で希美は髪留めも外した。きれいな黒髪がふぁさあっと肩口に垂れ下がる。
「いったい、何を……」
「ご褒美。んー、もう前払いかな、これは。絶対に次回も来てもらわなくっちゃ」
従姉は幸太を女子更衣室の床に押し倒し、覆いかぶさってきた。

「ちょ、ちょ、ちょ、希美姉ちゃん……っ」
「いいから。ご褒美だから」
女らしい曲線に恵まれた肢体の持ち主は、ふうっとやさしく息を吹きかけながら幸太のTシャツの胸に指を当ててくる。
「うふふっ。乳首のあたり撫でられると、男でも気持ちいいでしょう？」
指先は円を描くようにやわやわと乳首の周りを動く。
「う、うん。でも、おれ」
「いいのよ。大丈夫。あたしに任せて」
「ま、任せるって、何を……？」
汗で濡れたTシャツに少年の乳首の輪郭が浮き上がる。下着姿の従姉はそこに顔を寄せ、ねろりと舌を這わせてきた。
「わわ……希美姉ちゃんっ」
希美は綿の白い布地越しにそっと乳首を咥え、舌先でころころと刺激を与えてくる。
「ひいっ、ど、どうかなりそう」
初めて女の人に乳首を舐められた快感に加えて、希美の黒髪の先がさらさらと身体に当たってくすぐったい。ほのかな体臭が鼻先にまといついてくる。

「ああ、もうっ。幸太くんの反応、いちいちかわいいのね」
「だって、気持ちいいんだから、しょうがないだろ！」
「うふふっ。よかった。気持ちよくないと、ご褒美にならないものねっ」
若妻は手のひらで幸太の腹の上をくねくねとさする。手はさらに下がってトランクス越しに陰毛の上をまさぐり始めた。
「あらーっ、なんかじゃりじゃりしてない？　幸太くん？」
「それも……感じるから、やめてよ……」
特に従姉の指がペニスの幹に触れるたびに、思わずイッてしまいそうなくらいのぴりぴりした刺激が走る。
「遠慮なく気持ちよくなっていいのよ。ねえ、こういうのは、どう？」
今度はブラに包まれたおっぱいが幸太のTシャツの胸に擦りつけられる。
（わわっ。なんか、やわらかい肉で擦られてる……）
Fカップだという乳果実はブラが汗でべったりと張りついているからか、もっと大きいサイズに膨れ上がっているように見えた。擦りつけられるたびにそれが幸太の胸板でひしゃげ、離れるとまた元のふくらみに戻り、たゆんたゆんと左右に揺れる。
（ああ、おれ、もう、幸せすぎて、何もかもどうでもよくなってきた……）

「うれしそうな顔ね、幸太くん。次は、どうしようか」
従姉はいったん上体を起こした。下腹部が幸太の目に入ってくる。
（あれ、希美姉ちゃんのパンティ、なんか色が変わってる……？）
汗だけではないんじゃ？
ブラとお揃いの水玉模様の入った白いショーツは股布の部分にとろとろとした染みができていた。盛り上がった肉の丘に縦長の亀裂が浮き出している。
（希美姉ちゃんも、おれと同じで、気持ちいいのかな……感じてるのかなあ……）
少し気が楽になってきた。
いやいやこんなことをしかけているのでもなさそうだから。
（そうだよな。希美姉ちゃんがどういうつもりか、よくわからないけど、おれのこと大きらいだったら、絶対こんなことさせないはずだし。ようし）
幸太は下から自分の腰を希美の身体に擦りつけてみた。ちょうど幸太のトランクスのテントを張っている部分が、ほどよく熟れた若妻のショーツの股布の部分にぬるぬると当たる。
くちゅ、くちゅ、くちゅ……トランクスとショーツという二枚の布地を間に挟んで、幸太のペニスが若妻の肉裂の上を往復する。下着を挟んでいるもどかしさとむず痒さ

が不思議と気持ちいい。
「ああっ……希美姉ちゃんの身体やわらかくて……おれ、どうかなりそう」
「ん……あたしも……これ、いいかも」
従姉のショーツの股布が濡れているのと同じように、幸太のトランクスにできたテントの頂上は先走りの汁でべとべとになってきた。布地と布地が擦れ合うと、浸透しきったお互いの粘液同士が混ざり合い、ねっちょりと糸を引く。
（希美姉ちゃん、怒るかな……？）
下から手を伸ばし、思いきってブラにさわってみた。びっくりしたように一回身体を震わせた希美だが、そこにさわっちゃダメとは言わない。
乳首のあたりを指先で擦ると、かすかにコリコリとした感触が返ってくる。
いたずらっ子を窘（たしな）めるような顔になる従姉。
「ああ、幸太くん、そんなことして……」
「希美姉ちゃんのおっぱい、やわらかい……これ、乳首？」
「さあ、どうかしらね、うふふ。そんなこと訊かないの」
下腹部は若妻の下腹部に押しつけたまま。くちゅ、ぐちゅ、と肉茎が肉裂の上を往復する。エレガントな下着はシロップ状の液でますます濡れそぼち、亀裂の形だけで

なく陰毛の色まで透かせ始めていた。むっとするような生温かい匂いを二人の身体は放ち始めている。
（どうしよう……ひょっとして、このまま希美姉ちゃんと、しちゃうのかなあ？）
幸太の腕は希美のしなやかな背中を抱き寄せていた。その指の先が偶然、ブラのホックにさわった。そのとたん。
息を軽く弾ませながらも、希美は幸太の腕を振り払うように身じろぎし、また上体を離した。
「あのね、幸太くん。あたし、結婚してるんだから、もう、これ以上のことはだめなのよ。それは、わかるよね？」
「あ……う、うん」
幸太はがっかりするよりもむしろ、ほっとした。
若奥様相手にここから先に進んではまずいだろう、という意識はあったから。
（越えちゃいけない一線は、はっきりあるよな、やっぱり……）
それにと幸太は改めて思う。
（おれだってやっぱり初めての相手は初めてがいいしな）
幸太にとって希美は年上のきれいなお姉さん。しかも今は既婚。下着姿になって身

体を擦らせ合うだなんてことができただけでもう充分うれしすぎる。
（ここから先へ進むだなんて、望みすぎだし……今のこれでも充分すごいんだから）
掴み心地のよさそうな乳肉の持ち主は額にうっすらと汗の玉を浮かべながら、童貞少年をジッと見つめる。
「ね、幸太くん。来週も来てくれる？　本物のエッチはだめだけど、それ以外なら色々させてあげようかな。それじゃ不満？」
「ふ、不満なわけないよっ！」
幸太は思わず大声を出していた。
奥様ソフトボールチームのキャプテンはにっこり微笑む。
「じゃあ、来週も来てくれるのね？」
「うん。来るよ！」
「でもねえ。来るだけでご褒美っていうのもねえ……」
希美は汗ばんだ顔をちょっと傾ける。
「そりゃあ参加してくれるだけでもありがたいのは確かなんだけど。幸太くんだって、エラーとか三振とか、そんなのばかりじゃいやでしょ？」
だからね、と希美は勝手にルールをつくり始めた。

「空振り一つ、エラー一つで、幸太くんが好きなところにさわれる回数を一回ずつ減らしてくっていうので、どう？　最初は十回からスタート」
「うん、うんっ。それでいいよっ」
深くものを考えるゆとりなんてなかった。股間と股間をすりすり擦り合わせながらでは無理だ。先走りはとろとろとこぼれ通しだし、頭の中はぽわぽわした桃色の霧に包まれていて、従姉のことばも半分くらいしか頭に入ってこない。
「よかったあ。これであたしも一安心」
また希美は幸太の上に覆いかぶさり、悩ましくふくらんだ胸をこしゅりこしゅりと擦りつけてきた。ぐっしょりと湿った布地越しにツン、ツンと人妻の硬く張りつめた乳首が触れてくる。幸太の陰毛と希美の陰毛も下着を挟んで擦れ合う。希美のショーツは体液ですっかり色を変え、完全に肌色を透かしていた。
（は、裸にならなくても、こんなに気持ちいいんだ……知らなかった。ていうか）
ひょっとして全裸で抱き合うより気持ちいいんじゃないのか、これ……？
亀頭から洩れた先走りはトランクスをぐっしょりと濡らしているだけでなく、もう表に溢れて、希美の肌や下着にまでぬるぬるとこびりついてしまっている。逆に希美のショーツから染み出した汁みたいなものも、幸太の身体にくっついて粘ついた糸を

引いていた。そのヌメヌメ感がまた刺激的だった。
「うふふふ。ここも幸太くんは感じるところなのかなあー？」
二十二歳の指が、高一少年の脇腹から腋の下に向かってをつーっとなぞり上げる。
「ふわわっ」
くすぐったさと紙一重の快感に、思わず幸太は声を上げてしまった。希美の手のひらもさっきよりもずっと汗ばんでいるようだ。その手がゆっくりと幸太の身体を撫で回す。幸太の全身がまたどんどんと汗ばみを増していく。
ただ、時間が経ちすぎていることは気になってきた。
「あ、あの、おれたち、こんなことをしてるのが、もし他のおばちゃ……奥さんたちにバレたら、まずいんじゃあ……？　いつまでもここにいたら」
「内側からロックしてあるから平気」
「それでも怪しまれない？　おれはともかく、希美姉ちゃんは困るんじゃ……？」
「あらっ、あたしのことを心配してくれるんだね？　なら、そろそろフィニッシュにいってみようか。確かに、怪しまれたらまずいもんね」
「フィニッシュって……？」
「すっきりしたいでしょう？　ふふっ。恥ずかしがらなくても、男の人の身体のこと

ぐらい、わかってるんだから。幸太くんはジッとしていればいいのよ」
若々しさと色香を兼ね備えた人妻は童貞高校生のトランクスの中に指を侵入させてきた。窮屈なところに閉じこめられていたら苦しいでしょう、とささやきながら。
「希美姉ちゃん、指でっ、何をっ」
「怖がらなくてもいいよ」
従姉のしなやかな指は硬直した肉茎を探り当てると、そっと幹を握って引っ張った。先っぽがてろん、とトランクスからはみ出した。その拍子に包皮が引っ張られて、先走りに濡れた亀頭粘膜が少しだけツルリと露出した。
「ひいっ」
全身の産毛が逆立つような強い刺激が亀頭から幹に向かって走った。露出した傘肉からはつーんと童貞臭が立ち昇る。
「まあ、敏感なのね」
「だ、だって、こんなことされるの、初めて……」
仮性包茎のペニスの先端は今もまだ半分以上が皮に覆われている。希美はわなわな震えるその先端に自分の手のひらをあてがった。
「ひいっ、希美姉ちゃんっ、だめだよお、そんなこと、されたらっ」

「あたしの手に出していいからね」
亀頭の先端へやわらかな手のひらがきゅっと当たるだけで――ぞくぞくぞくっ！
「ど、ど、どうかなるっ」
「幸太くん。おちんちん、そんなに敏感なの？　いっそのこと剥いちゃおうか？」
ぺろりと一回くちびるを湿らせると、若妻はほっそりした指で円をつくって先端に巻きつけてきた。ぬらぬらの包皮を剥こうと根元に向かって下がっていく。が。
薄皮が剥き上げられるよりも先に幸太に限界が訪れた。包皮越しに指で押さえつけられているという刺激だけで下腹部はカーッと熱くなり、どろどろに溶けたヨーグルトのような精液が一気に尿道を駆け上ってくる。
「……あうっ、出るよおッ」
幸太は腰を浮かせ、びっく、びっく、と痙攣させた。どぴゅっ、どくどくっ！　激しい勢いでザーメンが噴き出した。腰骨から背すじにかけてすさまじい快感が突き抜けていた。全身の毛穴から放精に合わせるかのように新たにどっぷりと汗が噴き出す。一回二回と下腹部が硬直と発作を繰り返す。
若さと張りに満ちた肢体を備えた人妻は、肉棒の先端を手で包みこむようにして全部受け止めてくれている。かと思うと、

「もっと出るんじゃない？」
もう一方の手を肉棒の根元に当て、マッサージしてくる。
「い、今、色々敏感だから、どこにもさわらないで！」
まさぐられた刺激でまた強烈な快感に貫かれ、希美の手のひらに向かってさらにひと噴き、どっぷん！　と放ってしまった。全身の細胞を酸か何かで灼き尽くされるかのような激しい射精感だった。こんなにすごいのはさすがに初めて！
「はあっ……はあっ……」
噴出にかかった時間は全部で二十秒くらいだったろうか。女性の手のひらに向かって出したというだけなのに、これまでのオナニーでは味わえなかった快感だった。
熱がすうっと退いて冷静になってみると、なんだかすごく恥ずかしい。自分の顔が今度は羞恥で赤くなるのがわかった。
しかし新婚の若奥様はそんな幸太には構わず、
「わあ、幸太くんの精液、あったかい。それに、重いわねぇ……どれ、味は」
手のひらに溜めた精液を指ですくい取って舐め、ちょっと苦いわねと言い出した。
まさかそんなことをされるとは思っていなかった幸太は、ただただびっくりだ。
「や、やめてよ……おれの出したものなんて……っ」

気怠い身体を起こし、更衣室の隅にあったティッシュの箱から二、三枚ティッシュを引き抜いて、従姉の手のひらの上の体液を拭き取った。
「あら、そんなに恥ずかしかった？　もっと観察してあげたかったのに」
「そんなこと、いいよっ。それより、治療があんまり長くかかりすぎだよ」
「だってそれは、幸太くんがもう辞めたいとか言い出すからだよ」
「それはそうだけど……」
「じゃ、そろそろ戻ろうか」
服を着直し、ロックを外して更衣室を出ようとしたところで、おばちゃんたちがぞろぞろと様子を見にやってきた。
「お兄さんー、大丈夫ー？」
「まだ痛むのー？」
「あ、は、はいっ。あの、希美姉ちゃんがテーピングに異様に手間取って。あはは。でも、もう大丈夫ですから！」
若い人妻の唾液が染みこんだTシャツは、さいわい汗と見分けがつかなくなっていて、バレることはなかった。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

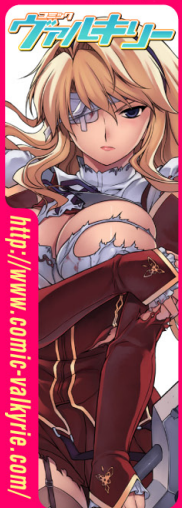
※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁でではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!